

「2017年 世界盆栽大会 in さいたま」に向けて
大宮盆栽村を訪ねる シリーズ第1回

盆栽は世界に通じる「和」の文化

藤樹園 二代目園主 浜野 博美 氏

来年の4月27日～4月30日に、さいたま市で「第8回世界盆栽大会 in さいたま」が開催される。国内外の多くの盆栽愛好家が集い、盆栽文化の普及と技術の向上、国境を越えた親善交流を目的として、四年に一度開催されてきた世界盆栽大会が、28年ぶりに“ふるさと”さいたま市に帰ってくる。

大会に向けて、盆栽の魅力の真髄に迫るために、大宮盆栽村にある7軒の盆栽園を訪ねることとした。第1回は、盆栽村の園主の最高齢、78歳の藤樹園の浜野博美氏（大宮盆栽組合組合長）にご登場いただいた。

昭和7年に創業した藤樹園

藤樹園は、石畳のかえで通り沿いの現在の場所に、現園主の父に当たる浜野元介氏によって昭和7（1932）年開園しました。浜野家はもともと大宮が地元で、私の祖父は市内の宮町に自宅を持つ内務官僚で、大宮警察の署長も務めた人物でした。

初代の園主元介は、薬剤師を目指して東京薬学専門学校（東京薬科大学の前身校の一つ）に入学したものの、鼻茸に罹って薬の匂いが嗅げなくなってしまったために断念。ある日、「趣味を職業化せよ」という講演を聞いて盆栽人を目指すことになりました。ここで言う「趣味」とは、絵描きや陶芸、染物のよ

うな、いわゆる実業とは思われていないものことです。つまり、「自分が好きなことを職業にすると面白い」という話だったようです。父は子供の頃から大宮氷川神社の縁日で植木を買ったりするのが好きだったため、盆栽村の蔓青園の先々代のもとに弟子に入り、そこで修業したのち、現在の場所で独立したのです。

私は昭和12（1937）年生まれで、父のもとに弟子に入ったのは、大学卒業後2年間の保険会社勤務を経て、25歳の時でした。父の暖簾を一代限りで終わらせるのはもったいないという気持ちでした。しかし、その頃は「技術は教えてもらうのではなく、自分で努力して盗め」という時代。親子であったためか、雑巾の掛け方や花台の持ち方についても、他の弟子以上に厳しくしつけられました。

朝早く起きて、乾いていたら水をやる。虫がついていたら取ってやる。「虫の活動は夏場は朝の4時から6時くらいまでだから、棚板はきれいにしておきなさい。そうすれば虫の糞がついているのがわかる」といったことをよく言われました。父は「盆栽をつくる前



穏やかさの中に熱の籠る浜野園主の語り